

広島大学大学院人間社会科学研究科・教育人文社会科学
学研究科人間総合科学プログラム（博士課程前期）
入学試験（令和8年8月実施）

受 験 番 号					
M					

問題用紙

専門科目

[一般選抜]

〔設問1〕

現代の日本社会で生きる人たちの身体と自己決定に関する問いをひとつあげ、その問いに社会規範、リスク、医療技術といった問題がどのように関係しているか論じてください。またそれらの問題について、医療人類学あるいは関連の研究領域でどのような学術的な議論がおこなわれてきたかも説明してください。

〔設問2〕

文化人類学の調査方法であるエスノグラフィ（民族誌）やフィールドワークが、どのような特徴を持つかを簡潔に説明してください。その上で、あなたが設問1に対してあげた問いに答えるために、これらの方法で調査をおこなうことがなぜ必要なのか詳しく説明してください。

解答例 **専門科目** **[一般選抜]**

〔設問1の回答例〕

現代の日本社会において、身体と自己決定をめぐる重要な問題の一つに、避妊の責任の偏りがある。避妊は本来、性交渉に関わる男女双方が担うべきものである。しかし実際には、妊娠の結果を身体的に引き受けるのが女性であるため、避妊や妊娠予防の責任も女性に集中しやすい。この問題には、社会規範、リスク、医療技術が密接に関係している。

まず、日本社会には「妊娠して困るのは女性なのだから、女性が避妊を管理すべきだ」という規範が存在する。学校教育やメディアでも、生殖に関する知識は女性の身体管理の問題として語られることが多く、男性の責任は見えにくい。その結果、望まない妊娠が起きた際には女性がより強く責任を問われ、「自己管理が不十分だった」とみなされやすい。

次に、この問題にはリスクの不均衡な分配がある。避妊に失敗した場合、妊娠の継続や中絶に伴う身体的負担を負うのは女性である。また、出産後の育児やキャリアへの影響も女性に集中しやすい。そのため、女性は常に妊娠の可能性を意識しながら行動することを求められ、身体管理の責任を強く背負わされている。

一方、医療技術の発展は女性の自己決定を支える側面を持つ。低用量ピルや子宮内避妊具（IUD）、緊急避妊薬などは、女性が自ら妊娠をコントロールする手段を提供している。しかし医療技術は自由を広げるだけではない。例えば「ピルがあるのだから女性が管理すべきだ」という考え方が生まれることで、避妊の責任がさらに女性へ集中する可能性もある。つまり技術は選択肢を増やす一方で、新たな責任も生み出している。

この問題について、医療人類学では自己決定を個人の自由意思だけでなく、社会的・文化的条件の中で形成されるものとして捉えてきた。また、フーコーの生政治論を応用した研究では、人々が自らの健康や生殖を管理するよう求められる仕組みが分析されている。避妊を女性の自己責任として扱う状況も、その一例である。さらにフェミニスト研究では、生殖を女性だけの問題とする考え方が批判され、避妊や妊娠に関する責任を社会全体で共有する必要性が論じられてきた。避妊技術や生殖医療が発達しても、社会規範が変化しなければ責任の偏りは解消されないことが指摘されている。そのため研究者たちは、自己決定を単に個人の選択能力として理解するのではなく、その選択を支える社会的条件やジェンダー平等の実現を重視している。

〔設問1の出題意図〕

志願者が研究の遂行に必要な学術的な知識を有しているか、またその知識を、論理的に説明できるかを試す問題である。

〔設問2の回答例〕

フィールドワークとは、研究者が対象となる人々の生活する現場に長期間入り込み、参与観察やイン

タビューを通じて、人々の日常生活や価値観を理解しようとする調査方法である。一方、エスノグラフィとは、そのフィールドワークで得られた知見をもとに、人々がどのような意味づけのもとで行動しているのかを記述・分析した研究成果を指す。これらの方法の特徴は、統計データや制度の分析だけでは捉えられない、人々の経験や語り、実践を具体的な文脈の中で理解しようとする点にある。

設問 1 では、「避妊をめぐる責任はなぜ主として女性に負わされるのか。また、それは身体の自己決定にどのような影響を与えるのか」という問いを取り上げた。この問いに答えるためには、フィールドワークとエスノグラフィによる調査が不可欠である。なぜなら、この問題は単に避妊技術の利用状況や妊娠率などの数値だけでは十分に理解できないからである。

例えば、統計調査によってピルの利用率やコンドームの使用率を把握することはできる。しかし、それだけでは「なぜ女性が避妊の責任を負わなければならないと考えているのか」「男性はその責任をどのように認識しているのか」といった意味の世界は見えてこない。実際には、恋人同士の関係性、家族から受けた教育、学校での性教育の経験、友人との会話など、さまざまな社会的要因が避妊に対する認識を形作っている。こうした要因は、人々への聞き取りや日常的な観察を通じて初めて明らかにできる。

また、自己決定という概念そのものが、人々によって異なる意味を持つ可能性がある。例えば、ある女性は自らピルを服用することを「主体的な選択」と考えるかもしれない。一方で別の女性は、「妊娠したくない以上、自分が管理するしかない」と感じているかもしれない。表面的にはどちらも同じ行動をとっているが、その背後にある認識は大きく異なる。フィールドワークでは、このような本人の語りを丁寧に収集することで、自己決定がどのような状況の中で実践されているのかを理解することができる。

さらに、医療技術の意味も人々の経験によって異なる。低用量ピルや緊急避妊薬は一般に女性の選択肢を広げる技術と考えられている。しかし利用者の語りを聞くと、「自由を得た」と感じる人もいれば、「避妊の責任を押し付けられた」と感じる人もいる可能性がある。こうした医療技術の社会的・文化的な意味は、制度や技術そのものを調べるだけでは把握できず、実際にそれを利用する人々の生活世界を理解する必要がある。

このように、「避妊の責任と自己決定」という問いは、個人の価値観、人間関係、ジェンダー規範、医療技術が複雑に絡み合う問題である。そのため、現場で人々の経験や語りを詳細に調査するフィールドワークと、それを文脈に沿って分析するエスノグラフィが重要となる。これらの方法によって初めて、避妊をめぐる責任がどのように社会的に構成され、人々の自己決定にどのような影響を及ぼしているのかを深く理解することができるのである。

[設問 2 の出題意図]

志願者が調査の遂行についての基本的な知識を有しているか、またその方法を、自らの研究上の問いと関連づけて説明できるかを試す設問である。